昭和初期の「東北飢饉」をどうとらえるか

河西 英通

凶作・飢饉へのまなざし

東北の1930年代は大災害の連続であった。31年と34年は凶作・飢饉におそわれ、その間の33年には三陸大地震・大津波にみまわれた。31年凶作・飢饉に関して、凶作の急性論と慢性論が併存していたことが注目される。東北の凶作は天災ではなく、「ブルジョア政策そのものの破綻」「世界経済恐慌の一環としての農業恐慌そのもの」であるとその資本主義的災害性を指摘する見解(日本プロレタリア作家同盟機関誌『プロレタリア文学』1932年2月号「北海道、東北地方の兄弟を救へ!」)と、東北の飢饉を過去数百年の「原始的」搾取の結果ととらえ、単なる「救済」や「豊作」では救えないと論じる見解(『時事新報』1932年2月8日付・大宅壮一「「飢饉」に非ず―東北の凶作地方を巡歴して」)である。

両者は必ずしも相反するわけではないが、なによりも東北社会の凶作・飢饉を目撃することで、その〈原始性〉が発見された点が重要である。「ルンペン小説」で知られた作家の下村千秋は『中央公論』1932年2月号に「飢餓地帯」と題して、つぎのような前年暮の東北視察談を寄せている。

> 飢餓は飢餓として救わねばならぬが、同時に、この機会に、岩手、青森の百姓達の生活が、この年まで、いかに原始的な惨めな生活に虐げられて来ているかを暴露して、都会の消費生活者の目を覚ましてやらねばならぬ。昭和の御代に、粟や稗を常食とし、ワラの中に寝起きしている日本人がいるのだ、という事実を、為政当局者の眼前へさらけ出して見せねばならぬ!

もう一つ証言を聞いてみよう。『昭和十年　太田正治・都築重雄・茂木和夫「北海道農民が視た凶作地」八雲史料』(大石勇「昭和恐慌と凶作の東北農村」『徳川林政史研究所研究紀要』32、1998年)にはつぎのような記述がある。

> 岩手の農民は実に貧しさに慣れて来た人々である。押しよせる巨濤のように次から次へと襲いかかって来た災害、そのほか災害として片付けることの出来ない性質の経済的打撃にも、彼等は実に辛抱強く堪えて

来た。この山間の農民が豊かな原始的生活を楽しんでいたのは何時の時代までであったか。少なくとも彼等が資本主義経済の大波濤に捲きこまれて、急テンポに没落しはじめたのはここ十数年来のことであろう。東北農民の没落過程は、その儘近世経済の発展過程である。

そうした中で、34年凶作・飢饉では稗飯を貪る児童(『東京朝日新聞』1934年10月15日付「東北の凶作地を見る」)や生の大根をかじる子どもたち(『東京日日新聞』1934年10月27日付「凶作の東北を見て」)の写真が東北飢饉のシンボルとして知られることになる。しかし、ある農業経済学者はセンセーショナルなジャーナリズムは東北社会の正確な認識を阻害するものであり、人々は凶作年に限らず「麦粟蕎麦稗大根等の混食」を主食していると指摘した(『農業経済研究』1935年4月号・木下彰「経営組織より見たる東北農業の特殊性」)。ここでも凶作・飢饉をめぐる突発と常態の二つの眼差しが交差している[1]。

議論されるべきは東北の農民や子どもたちの食生活における稗や大根の消費ではない。稗を食べ大根をかじる子どもたちはこの時代とこの地域に限らない。そうした姿を東北凶作・飢饉のシンボルとして伝えたマスコミや文化人、それを受容した読者の眼差しこそ問題なのである。つまり、これらの写真からわれわれが読みとるべきものは、〈凶作によって稗や大根を食べざるをえない飢饉状態に追い込まれた東北の子どもたち〉や〈稗や大根を子どもたちに食べさせざるをえないほど貧窮生活に追い込まれた東北の大人たち〉の存在ではない。逆である。そうした子どもたちの姿を見つめる視線、日常生活の中で子どもたちが稗や生の大根を食すような風景がほとんど見られなくなっていた地域、都市の視線である。

いったい「東北飢饉」はなぜ発生し、どのように記憶されていったのだろうか。近代日本史にとっていかなる位置にあるのだろうか。岩手県の地で地域史研究を進めた森嘉兵衛は「東北凶作恒久対策」(『農業経済研究』1935年11月号)と題した論考で、つぎのように米作中心主義を批判した。

採算を無視した反当増収競争の奨励は東北農民に何の利益を齎したか。稗や粟は小鳥しか喰はないものゝ様に考へさせ、米のみが日本人の食物の様な観念を植ゑつけた教育、指導は東北農村に何等の利益も与へなかつたのである。

では、東北農村はどうすればいいのか。森は「かや・はしばみ・とち・くるみ等を植林し、兎・豚・羊・山羊を飼ひ、手工業を興し、水稲を主たる農業を避けなければならない」と提唱し、国有林解放も訴えた。森の視点は東北農業の多元的な展開だろう。近代の東北農業には、「平地農業と高原農業との区別」も、「南方農業と北方農業との区別」もなく、西洋農学理論が直輸入さ

1
1934年凶作・飢饉に関する近年の研究として、玉真之介「1934年の東北大凶作と郷倉の復興―岩手県を対象地として―」『農業史研究』第47号、2013年、参照。

れて、土地の老農の意見は無視され、伝統農法は「塵芥」扱いされた。それが今日の東北不振の一因だと森は指摘した。

差別される稗から、逆襲する稗へ

1930年代、稗は「都会人には想像も及ばぬ」(『東京日日新聞』1934年10月17日付「稗飯は最上等　悲惨な学童のお弁当」)劣悪な食材とみなされていたが、前述したように東北民衆にとっては主食の一部を構成していた。しかしまた、米も食べていた。「此頃の百姓は米を食う事に慣れている」(『岩手日報』1934年9月19日付「凶作地　上閉伊を行く」)、「どんな水飲み百姓でもみんな白い飯を食っている」(『青森県を語る』東奥日報社、1934年11月)などと食生活における米の比重の大きさが指摘されている。給食も「米と麦のカテ飯(混ぜご飯)」ならば、子どもたちは恥ずかしくはなかった(『岩手日報』1934年11月18日付「冷害地を行く」)[2]。

稗が一挙にクローズアップされてくるのは1938年から39年にかけてである。それは凶作・飢饉対策というより、戦時体制・総力戦体制下の食糧政策としてであった。大凶作の年、1934年12月に結成された農村更生協会の機関誌『村』1939年5月号は、「稗を蒔こう！　戦時下生産拡充を急速に実現する為には、稗以外の作物は有り得ない。国民食糧として、家畜飼料として―稗を食はう！　太古以来日本民族の根本食料たりし稗を。」というキャッチコピーを先頭に、「稗」叢書全17輯の刊行予告を載せている(すべて39年に刊行)[3]。

第1輯:稗栽培運動の提唱(石黒忠篤)　第2輯:稗の未来(柳田国男)　第3輯:稗の利用価値(小原哲二郎)　第4輯:稗の栽培(松田延一)　第5輯:農と稗(早川孝太郎)　第6輯:稗と民俗(早川孝太郎)　第7輯:稗の処理(松田延一)　第8輯:稗と稲(藤原相之助)　第9輯:稗の重要性(古宇田清平)　第10輯:稗と国策(杉野忠夫)　第11輯:稗の精白(小原哲二郎)　第12輯:飛弾と稗飯(江馬三枝子)　第13輯:稗食の栄養に就いて(小泉親彦)　第14輯:稗の加工・上　稗麹と稗味噌の作り方(小原哲二郎)　第15輯:稗の加工・下　稗醤油の造り方(小原哲二郎)　第16輯:朝鮮及び満蒙の稗(早川孝太郎)　第17輯:岩手県の稗食、佐渡外海府の稗(鈴木脩一・稲葉美佐久)

これより数か月前の、大日本農会機関誌『農業』1938年9月号に小原哲二郎(栄養学)の「穆〔稗〕の栄養価と加工利用法」が載っている。それを受けて同年11月22日に農村更生協会は研究会を開き、柳田国男が「稗を語る」と題した談話を行った。これが『農業』1939年1月号に載り、さらに「稗」叢書第2輯『稗

2
ただしまったく反対の報道もあった。『東京朝日新聞』1934年11月14日付「稗か粟が欲しい」は、「東北地方の農民は豊年の時は取つた米は他に売り、稗や粟を常食としてゐるので今回も食ひつけぬ飯米では困るから稗か粟を配給してくれといふのである」と伝える。

3
農村更生協会は1934年に「農村更生ニ関スル諸般ノ調査研究及農村ニ於ケル更生事業ノ援助ヲ為ス」ことを目的に設立され、「農政の神様」と称された石黒忠篤ほかが理事に名を連ねていた。同協会については、松田延一「戦前の農村更生協会の活動」『農村経済更生運動―その歴史と意義―』全国農地保有合理化協会、1990年、参照。「稗」叢書には第18輯:食糧としての稗(小原哲二郎)もあった。

の未来』として同年5月に刊行された。柳田は、稗は忘れられた作物であり、「粗悪なる食物」と言われてきたが、稗の増産はひとり東北の問題ではなく「一国共同のもの」、つまり国民的課題だと論じている。柳田において、稗は米に駆逐された食物だったが、いまや稗のリベンジが図られていると見た[4]。

第5輯の早川孝太郎（民俗学）『農と稗』も稗を高く評価し、「食料作物として、古来から此の国土に存在が明かで、然も最も粗放な方法にも堪えて、収穫の確実性がある穀物としては、稗を措いては他に求め得ない」「所謂救荒植物と一緒にして、凶作の食料とし、特に卑しい作物だなどと謂つたのは、同じく農業に関係はあつても、直接に生産に携らぬ階級で、農学者とか亦は司政の衝に在る人々であつた」と明確かつ辛辣に論じている。早川は第6輯『稗と民俗』でも、稗は従来「あまりに世人の関心から隔離された観」があり、「凶荒時の食料」とされ、稲の「作附不可能」時の「急場の補ひ」と消極的に位置づけられてきたが、そうではない、「実際に国民生活と深い交渉を持ちながら、常に閑却され来つた稗を通して、吾々民族の生活の跡をたづね、かくれたる伝統を顧ふ機縁」とせねばならないと警告した。

第10輯の杉野忠夫（拓殖学）『稗と国策』は、稗は飼料であり食糧であると位置づけて、満洲に「飼料増進挺身隊」を送るとともに、国内荒地を利用して飼料増産運動を展開すべきだと提唱している。第13輯は小泉親彦（陸軍軍医中将、のち東条内閣厚生大臣）『稗食の栄養について』は、稗食は「将来の大和民族の発展上」重要であると論じている。小泉については、高岡裕之の研究に詳しいが、医学の活用による「人的戦力」の強化をめざす「軍陣衛生学」の提唱者であり、「衛生省」（「保健社会者省」）の設置も構想していた。小泉は同書の中で、第一次世界大戦の教訓として、戦時食における肉類よりも穀類の優位性を指摘したうえで、米食神話についてこう批判する。「米の魅力は凄いものであります。一度米の味を覚えましたら、如何なる方法を講じてでも米を食ひたいといふ欲求は凄いものである。〔中略〕凡ゆる生活の必需品の一部をさいても米を買つて来るといふやうに、米の魅力は実に大きなものであります。」米の魅力は魔力であり、危険性といってもよかった。

これに対して小泉は、稗をつぎのように位置づけている。

> 稗といふものは、今までは知らずに居つたが、重要なる一つの食糧であるといふことを考へなければならぬのではないかと思ふのであります。〔中略〕殊に日本人の食物は外国人と違つて、マア米と塩で出来て居るやうなものであります。そこにこういふ穀類の奨励せられることは洵に結構なことであり、又将来の大和民族の発展上茲に思ひをひそめて研究を進めなければならぬと思ふのであります。

このように衛生主義的「社会国家」を提唱した小泉や石黒忠篤農相らに

4
柳田国男は米と稗の相克について、1937年8月「飛騨と郷土研究」で日本人の「米を食はうとする癖」の強さを指摘する一方、1940年5月「米食の歴史」では、「歴史が更に久しく、又由緒の古いものは稗であつた。…上代人の強健を最も多く支持して居たのは、稗であつた」とのべて、稗から米への主食の転移を論じている。

よって、戦時体制のもと、稗は最適最良の戦時食とされたのである。1941年には「稗」叢書をもとに農村更生協会は『稗食の研究』を出している[5]。

「東北飢饉」のメカニズム

1934年凶作について改めて整理してみよう。前年の33年、米は大豊作だった。しかし、同年成立の米穀統制法により、公定価格による政府買上げ、飯米の売り払いとなり、34年5月頃には飯米不足が予想された。農家は米の購入者・消費者でもあったのである。たとえば、この事態を『時事新報』1934年6月24日付「東北、北海道地方の飯米飢饉深化す」はこう報じている（適宜読点を付した）。同記事の副題は「薬が効き過ぎた統制法」であった。

> 本年は農家にとつて頗る有利な公定価格による政府買上げがあつたゝめ、我勝ちに飯米に至るまで売り払つた農家が非常に多く、この結果東北地方の如く農〔豊ヵ〕作年には想像し得ない飯米飢饉が襲来するに至つたものであり、而も最近の米価高はこれ等の農村に飯米購入すら妨げ、我等に米を与へよといふ悲痛な叫びが随所に揚つてゐる。

さらに朝鮮や台湾などの植民地米の大量移入も問題となった。朝鮮防穀連盟、全台湾人民大会、全国農民大会など米をめぐって帝国内は地域対立を見せ始める。

こうして長期的な米をめぐる供給と需要の矛盾が噴出したのである。「東北飢饉」は凶作そのものの結果ではなく、市場に出回る米の激減と米価の高値基調によって、農民は飢饉に追い込まれたのである。『秋田県農会報』1934年12月号「寂しく〔昭和〕九年を送る」は、米穀統制法をめぐる複雑な対応をつぎのように記している。

> 過ぎし八年の終りには其の実施を見た米穀統制法に聊か遺憾を見た米価にも拘はらず、之を其の以前に比べては心ひそかに感謝の念がどこかに潜在しおつたことは争はれない〔中略、しかし〕之を農家の飯米欠乏期たる五月以降の米価関係からすれば本統制法の不備欠陥は単なる不備に留まらずして窮乏農村民に更に拍車を加ふる事態を提出したものと言はざるを得ない。

東北各県の農会報のうち、『秋田県農会報』は積極的に米穀統制法に関する議論を行い、警戒心を深めていたが、それほどの秋田県農会でさえ、米穀統制法に「心ひそかに」幻想を抱き、1933年の大豊作により油断していたのである。すなわち、飢饉は凶作の直接的結果ではなく、農政の結果として生れた

5
石黒忠篤は『読売新聞』1940年10月4日付「不足米は移輸入で補充　国民に不安は与へぬ」で、「内地米で足りぬところは朝鮮台湾の外地米の移輸入で国民には絶対不安は与へない。しかし、国民諸君が気を緩めていゝといふわけではないのだ。私は稗の粥や稗と馬鈴薯の混食を時々試してゐるが却々美味い。現在稗を手に入れるのがむつかしいので無理にすゝめはしないが、少し研究すれば代用食には困らぬ」と豪語している。また同紙1941年5月18日付「稗の加工利用」において、理化学研究所の庄司謙次郎（醸造学）は「われ〳〵は今事変になつて飯は米ときめてゐたのが間違ひであるのに気が付いたのである」とのべている。

のであり、その意味において帝国主義的〈凶策〉と呼ぶべき事態だった。しかし、この事態は覆い隠されなければならず、岡田啓介内閣（民政党系）と政友会の対立の下、1934年11月の第66回臨時議会や政友会・民政党の東北北海道大会において、東北振興は軍事振興の方向に歪曲させられていく。

そうした歪曲は国民意識においても〈同情〉の形をとって見られた。たとえば、『婦人公論』（中央公論社）や『主婦之友』（主婦之友社）といった女性向け総合雑誌では、東北凶作の記事はきわめて少ないが、この時期唯一東北凶作の特集を組んだ『婦人公論』1934年12月号の巻末「編輯者のことば」は「都会に住む私共の心は暗くなるばかりです」とのべて、こう語っている。

> 此記事を読まれる時に貴女の胸は曇るかもしれません。けれども、我々は只一時の感傷を戒めねばなりますまい。〔中略〕「これが？」と思はず叫ばしめる児童のお弁当。その写真をお妹さんのそれと比べてみてください。

同情は子どもからもされた。大門正克は「東北地方の凶作」というつぎのような作文（東京中野・桃園第二尋常小学校〔現中野区立桃園第二小学校〕後援会誌『ももぞの―学校と家庭』1934年第27号）を紹介して、子どもたちの帝国意識が東北に対する優越意識にアナライズされていると指摘している。

> 東北地方の困ってゐらっしゃる人々〔と〕〔中略〕毎日々々こまる事もなく仕合せにくらしてゐる私達とくらべると、あまりにおかはいさうでなりません。年々の凶作のために御飯もたべられないで、木の実などをたべながら、さびしく暮して居て、仕事も出来ない東北の人達のことを考へると、仕合せに勉強ができる私たちは、感謝の気持ちで一ぱいになります。〔中略〕早く私達のお上げする真心のこもつたお金がとゞいて、東北の人達の助けになるやうにしたいと思ひます。

「年々の凶作」という表現に、東北の凶作が突然見舞われる自然災害ではなく、常習性を持っているという認識がうかがえる。ともあれ、女性雑誌と東京の子どもはいずれも、比較→優越→同情というプロセスを形成していることがわかる。東北凶作を「自然現象」として、それもどこでも起こりうるような災害としてではなく、都市に暮らす自分たちには原理的に無縁な、東北に特有の「自然現象」として受けとめているのである。

福島県では1935年にも凶作に襲われ、『福島県農会報』同年11月号の「凶作地踏査記」には、つぎのようなあきらめが見られる。「聴き飽きた「凶作」の声、世間でも此声に耳を傾けなくなつたほど余りに聞き慣れたこの「凶作」の声が、またも今年県下各地から悲しげに聞えてきた」。「政府を始め各方面の関心はすつかり薄らいで救済の手は恐らく前年の何分の一しか差し延べられない雲行きにある」。「前年の凶作は惨めとはいへそれでも前々年の大豊作

の直後のことゝて多少の余裕があつたものだが今年の凶作は踏んだあとを蹴られたも同様「どうにもならない」状態となつてゐるのだ」。

同情はされる側に遠慮を生む。いつまでも同情されるのは辛いし、屈辱でもある。では自立可能かといえばそれは難しい。そのはざまで人々は苦しんだ。相馬郡のある村長の嘆きが「凶作地踏査記」から聞こえてくる。

> 昨年さんざ世間さまの同情に預かつたので、何とかことしは御厄介にならないつもりで、懸命にやつてきたのですが―この有様では如何とも仕様がありません。

凶作下の東北民衆が苦しんだのは、ひとり経済的困窮のみではなかった。みずからを見つめる社会的「同情」の眼差しにも苦しんだのである。

そうした苦しみのカラクリを抉り出したのが、哲学者の戸坂潤である。戸坂に「高等警察と冷害対策」(『文藝春秋』1934年11・12月号)と題する論考がある。ここで戸坂は東北救済キャンペーンに見られる「センセーショナルな同情」にメスを入れる。「同情というのは、社会現象ならばお説教すべき処を、自然現象として見るのでお説教の代りに持ち出されるもの」であって、世間は「東北地方問題を専ら一つの自然現象として見ようと努力している」と、上述のような同情論を批判している。

戸坂は「自然現象」が凶作→冷害→気象的地質的現象と次第に矮小化されていることに対して、「まさか火山の爆発を鎮圧したり、日本の水温を温めたりして、今後続くであろう東北農民の貧困を防止しようとは思っていないだろう」と皮肉り、本質を衝く。「一体凶作の問題は「米」の問題ではないか」。そこに気づかない農林省の東北対策は不可思議だと疑問を呈し、小作争議の深刻化は東北凶作が「一個の社会現象」であることの証左ではないかと指摘して、こう結論づけている。

> 社会現象とあれば、東北の冷害は、独り米穀問題ばかりでなく、偉大な軍事予算の問題や、対軍縮会議兵力量の問題などと切り離しては意味がない筈で、そこまで行くと、問題は愈々「同情」や何かでは＊＊＊（原文ママ）せなくなるのである。東北地方の救済と、軍事予算との、数量上の連関を、ハッキリと私に教えて呉れる人はいないか。

戸坂の視界には、帝国日本・軍国日本の国策(凶策)のなかで発生した「社会現象」としての東北凶作・東北飢饉が「自然現象」に歪曲され、東北社会の必然論や宿命論に原因が転嫁されようとしている構図が見事に映っていた。

さらに「凶作」の位置づけに関して、鋭い指摘をしているのがつぎの『東京市農会報』1934年12月号「東北地方の凶作に就て」である。執筆者は帝国農会参事の青鹿四郎、農業経済地理学が専門だった。

6
ローザ・ルクセンブルクは『経済学入門』(1909～1913年におけるドイツ社会民主党中央党学校での経済学講義録、佐野文夫訳、叢文閣、1926年)の末尾(462頁)で、資本主義にとって後進地域がいかなる意味で不可欠であるかということをつぎのように論じて、書を閉じている。

> 資本主義生産様式はそれ自身としては、すべての旧式の生産形態をどこからも駆逐するものとすれば、なほすばらしい拡張を遂げることができる筈である。〔中略〕しかしながら資本主義は、取りも直さずこういふ発展に際して根本的矛盾に陥るのである。―即ち資本主義生産が旧式の生産に取つて代れば代るほど、既存の資本主義経営の拡張要求に

凶作夫自身は、切り離されたる天災の独立的存在では無い。〔中略〕ローザの云へるが如く「資本主義的生産のみの行はるゝ自給自足的資本主義社会は何処にも存在しない」のであつて、資本に奉仕する下段階群なる一般公式に依つてのみ、売られ行く娘、夜育症の母、乳児の死亡率が理解されるのだ。〔中略〕天才と人災の十字砲火、之が真の姿である。〔中略〕之が除去は、一般資本主義の止揚の領域に包含さるべきものであり、単に一地方的救護事務に依つて解決さるべき程しかく簡単な問題では無い。

ここでローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』第26章「資本の再生産とその環境」の一節が引用されていることに注目したい。強調されている点は、資本主義国家における先進（資本）地域と後進（封建）地域の単純な併存関係ではなく、先進・後進関係を、すなわち後進地域を不可欠の要素、必須の構造として内包させながら成立・推進・膨張する資本主義そのものの矛盾的特性である。それは、資本主義の終点としての帝国主義の位置づけであり、解決として社会主義の到来の予告を意味している[6]。

こうしたローザの視点は確実に日本社会に浸透していたと思われる。たとえば、『社会運動通信』1935年1月31日付「東北凶作地に対する根本方針成る」によれば、東北飢饉救援東京無産団体協議会は「今回の東北地方の飢饉が単なる自然的災害によるものではなくこれに対する抵抗力が経済的になかつたといふことに最大の原因を有する」として、その全責任を「資本主義社会の支配階級」に帰している。傘下の『自由聯合新聞』は、「現在の日本の農業生産関係は資本主義的でもなく封建的な生産関係でもない半封建的な半×××（原文ママ）な生産関係」であり、東北農民はその「最も低い部分」に位置しているとのべ、東北の悲劇をその原始性にではなく、その現代性（＝半封建的資本主義）に求めている。

こうしたいわば国内版〈従属理論〉・〈資本蓄積論〉ともいうべき視点を直截に表現していたのが、『現代の秋田』1938年11月号掲載の「東北の労働者に与ふ」のつぎの一節だったであろう。

東北の振興！　その声、美である。されど吾等兄弟が真に目醒めない限り、そは、都会人の、資本家の、東北搾取の別名に過ぎないぞ！

「東北飢饉」の歴史的位置―忘却される稗と東北―

戸坂潤や森嘉兵衛などの本質的な議論もあったが、大勢は東北の〈後進性〉

対して、利潤関係がつくり出すところの市場限界はますます狭くなつてゆくのである。資本主義の発展が非常に進んだとして、地球上において人類の生産するものは、全部資本主義的にのみ生産されるようになつた場合、言ひかへれば近代的賃銀労働者を伴ふ大経営において、資本主義私的企業家によつてのみ生産されるようになつた場合を、一寸でも想像して見るなら、右の事情は全く明白になる。即ちその時に資本主義の存立不可能が明瞭の曝露されるのである。

ローザに従えば、資本主義は「旧式の生産形態」＝後進地域を抜きには成立し得ない矛盾的構造・特性を持っているのである。故に後進地域の解放は「一般資本主義の止揚」につながらざるをえない。さらにこの点は『資本蓄積論』（原著1913年）の末尾（第三二章「資本蓄積の領域としての軍国主義」）において、社会主義への展望として語られている（長谷部文雄訳、岩波文庫・下巻、1934年、218~219頁）。

資本主義は、普及力をもつた最初の経済形態、すなはち、世界に拡がつて他のすべての経済形態を駆逐する傾向をもつた、他の経済形態の併存を許さない、一形態である。だが同時に、それは、独立しては・すなはちその環境および培養土としての他の経済形態なしには・存在しえないところの、最初の形態である。すなはちそれは、世界的形態たらんとする傾向をもつと同時に、その内部的不可能性のゆゑに、生産の世界的形態たりえない、最初の形態である。それは、それ自体において一個の生きた歴史的矛盾であり、それの蓄積運動は、矛盾の表現であり、矛盾の絶えざる解決であると同時に強大化である。ある一定の発展程度に達すると、この矛盾は、社会主義の原理の適用によつての他には、決して解決されえない、―社会主義の経済形態は、もと〳〵世界的形態であると同時に、それ自体一の調和的体制である、けだしそれは、地上のあらゆる生産諸力を開発することによつて、蓄積ではなしに、労働する人間そのものの欲望の充足を、目的とするであらうから。

ローザ・ルクセンブルクに関する最新の研究として、『思想』2019年12月号（第1148号）「ローザ・ルクセンブルグ―没後100年―」がある。とくに植村邦彦「世界システム論とローザ」参照。

をいかに食い止めるかという方向に進み、農村更生協会や厚生省が設立される。1939年から41年にかけて稗は〈一瞬の輝き〉を放ち、稗播き運動（石黒忠篤「稗栽培運動について」『農業』1939年8月号）もおこった。しかし、実際には稗の栽培面積・収穫高ともに1940年代に入り、激減する。

マスコミの動きをみると、〈一瞬の輝き〉はあっという間に消え去った。米食は日本人にとって「信仰的な問題」「容易ならぬ真剣な問題」だったが（『朝日新聞』1939年10月7日付「戦時下、節米の必要」）、戦時体制下、「米と味噌」への執着を捨て去り、「興亜の大和民族」は「高粱飯、粟粥、肉饅頭に満足して支那大陸の経営に、或は又芋や、タローイモ、サイゴン米のライスカレーを満喫しつゝ南方資源の開発に活躍しなければならない」とされた（『朝日新聞』1940年9月1日付「米は粟、稗に劣る」、執筆者は理研の井上兼雄（栄養学））。まさに「食糧新体制」の到来であった（『朝日新聞』1941年4月1日付「食糧新体制は今だ」）。

こうした〈食糧大東亜共栄圏〉構想には批判もあった。1941年6月に仙台市で人口問題東北地方協議会が開かれたが東北産業科学研究所主事の小岩忠一郎（のち仙台市助役）は、物資自給率の高度化は国内地域の重点化であり、外地＝植民地重点主義は「国防体形」としては脆弱なので、「大東亜共栄圏」モデルと国内地域開発のバランスをとる必要があると説き、その点から東北を重要視して、特別な産業配置をほどこし、「一種のアウタルキー（自給自足経済）」を創出することを提唱している（「国土計画と東北産業の地位」『人口問題資料第四十六輯・東北人口』1941年）。

しかし、象徴ともいうべき稗が「一国共同のもの」（柳田国男）として米にとって代わることはなかった。「戦争食糧の多角化」政策のなかで、稗栽培運動は「時局の要請する政治性」と結合して存続したにすぎない（『読売新聞』1943年9月29日付「稗　水田よし畑作よし」）。日本の帝国主義は米の帝国主義でもあった。植民地台湾の新聞はその点を「大東亜戦は米で育まれた大和民族をして米を主食する大東亜共栄圏の諸民族を指導する盟主として君臨せしめることとなった」とズバリ衝いている（『台湾日日新報』1942年9月7日付「台湾と共栄圏食糧対策」）。稗は最強の戦時食物になりそこねた。

大日本婦人会機関誌『日本婦人』1944年3月号は座談会「決勝の食糧戦」を掲載している。広く銃後を守る女性たちに訴えた記事である。米不足対策にあげられている主要食糧品は、麦・甘藷・馬鈴薯などである。出席者の一人、食糧管理局長官の湯河元威（戦後、農林中央金庫理事長）はつぎのようにのべる。「麦は昔は相当主食として食べられてゐたが、いつの間にかどこでも米を食べるやうになつた。これを昔に帰つて大いに主食として食べることです。」数年前に稗が座っていた席に麦が代わって座っている。座談会では稗は一顧だにされていない。

いずれにしても、「戦時体制米」「決戦米」も叫ばれる米穀中心食糧政策は根強く、稗は嘘のように主要食糧品から脱落・消滅して行った。稗ブームに乗ろうとした前述の如き民俗学・栄養学のショック・ドクトリンも失速し、伝統的食文化重視ではなく軍事・国防優先のなか、いわば「軍学共同」路線から柳田・早川・杉野たち、はては「軍陣衛生学」の小泉さえも振り落とされてしまった観がある。今日、軍事研究と学術研究を極力結びつけようとする動きがあるが、〈稗と戦争〉の関係はきわめて教訓的な出来事ではなかっただろうか。

以上の結果として、1934年凶作・飢饉はナショナルな食糧政策の大転換を引き起す画期とはならず、あくまでもローカルな悲劇、〈後進〉東北に特有の不幸な現象として認識されることになる。詳述する余裕はないが、対比的に表現するならば、〈惨事〉としての東北凶作・飢饉であり、〈期待〉〈希望〉としての満洲農業（日満食糧自給体制）・「南方のウクライナ」（「東亜共栄圏のウクライナ」、食糧基地東南アジア）という構図である[7]。

戦場の拡大にともない、東北の食糧は忘れられていった。しかし敗戦で満洲も「南方のウクライナ」も失うことで、必然的に日本社会は食糧難に直面する。東北が食糧基地として再登場する時代がやってきたのである。ただし1934年凶作・飢饉の歴史的意味を問うことなく、すなわち帝国日本のアジア侵略の責任を問うことなく、東北は〈後進〉規定のなかに置かれ続け、変わることのなかった・ない典型的〈日本の農村〉として、描かれ続けることとなる。ローザ・ルクセンブルク流の国内版〈従属理論〉・〈資本蓄積論〉の展開もまったく見られなかった。東北史の戦後的展開はこうしてスタートしたのである。

付記：当日の発表内容をもとに、いくつかの資料の引用に努め、事実関係を加筆した。

7
玉真之介『近現代日本の米穀市場と食糧政策―食糧管理制度の歴史的性格―』筑波書房、2013年、「第5章　戦時食糧問題と農産物配給統制」、大豆生田稔「戦時期の外米輸入―一九四〇～四三年の大量輸入と備蓄米」『東洋大学文学部紀要・史学科篇』第39号、2013年、参照。

【参考文献】

大門正克『増補版・民衆の教育経験　戦前・戦中の子どもたち』岩波現代文庫、2019年

岡田知弘『日本資本主義と農村問題』法律文化社、1989年

川内淳史「近現代東北の転換点―戦時期「人口問題」と地域社会―」、大門正克ほか編『「生存」の東北史　歴史から問う3・11』大月書店、2013年

河西英通『続・東北―異境と原境のあいだ』中公新書、2007年

河西英通「創られた〈東北〉　東北凶作と東北研究」、熊谷公男・柳原敏昭編『講座東北の歴史　第三巻　境界と自他の認識』清文堂出版、2013年

高岡裕之『総力戦体制と「福祉国家」』岩波書店、2011年

『毎日新聞』2018年8月15～21日付岩手版「稗と戦争」